

下町散歩・土手通りと浄閑寺

児玉 寛嗣

浅草から日比谷線・三ノ輪駅方面に向う道路は土手通りと呼ばれている。その歴史は徳川幕府成立直後に遡る。当時、このあたりは湿地帯で隅田川が氾濫して浅草が洪水に見舞われることが度々だった。浅草には家康も重要視した浅草寺があり参詣者も多かった。そこで幕府は諸大名に堤の普請を命じた。第二代将軍、秀忠の時代のこと。堤であつたので土手通りと言われた。だが、その部分だけが高くなっているように見えない。全国の大名たちが協力して作つたので日本堤とも呼ばれている。その後、土手通りの浅草側に遊郭街、吉原が日本橋から移転してきて新吉原と呼ばれるようになった。三千人の遊女がいるとされ、大きな遊郭街となつた。そこに向かう人たちで通りはさぞかし賑わつたことだろう。

一方、この界限には哀しい歴史の跡も残されている。遊郭街から一〇分ほど三ノ輪方面に向かつて歩くと浄閑寺というお寺がある。この寺は死亡した遊女を葬ってきた。身売りされ、性の奴隷となつた女たちの終着駅だった。逃亡などを計つた遊女は素っ裸にされ荒菰に巻かれ「〇〇売女」という戒名をつけられて寺に放り込まれたという。安政の大地震で亡くなつた多くの遊女が、投げ込み同然に葬られたことから「投げ込み寺」とも言われようになつた。関東大震災や東京大空襲で死んだ遊女も祀られているという新吉原総霊塔があると知り、居合わせた箒を手にした寺男に案内してもらつた。それは墓地の一郭にあり、花が添えられていた。彼の話では、訪れる人も多く、花が絶えないそうだ。塔に合掌した。境内には俳人、花又花粹の「生まれては苦界、死して浄閑寺」という句碑や遊女の運命に同情を寄せて、よくこの寺を訪れた永井荷風の詩碑もある。

東京は明治以降、大きな変貌を遂げたが、下町のそこそこには、寺院や通りなどに古い時代の名残りが見られる。この通りや寺も江戸の歴史を物語る生き証人だろう。下町散策の魅力は尽きないものである。